

教区だより

2022

3月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第384号

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思ひます。



私たちは 涙の中に いる

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

- 1 頁 「ことば」
- 2 頁  悲しみが通じあう時 一愚禿悲歎述懐を通して—
《第11回》 四衢 ^{よつつじ} ^{あきら} 亮 氏
- 3 頁 「今、この時に、親鸞聖人に会う」 関 ^{せきぐち} 口 ^{しんじ} 真爾 氏
- 4 頁 「教区教化推進本部 出版部会」
- 5 頁 「教区教化推進本部 副本部長所信表明」
- 6 頁 教務所からのお知らせ

イマダカラ[®]

出版部会 ^{なかの} 仲野 ^{えりこ} 恵理子



げどうほんじ にけんじ
外道梵士尼乾志に

こころはかわらぬものとして

によらい

如来の法衣をつねにきて

きじん

一切鬼神をあがむめり

(聖典五〇九頁)

先月の歌に続いて、当時の聖道諸教が教えを変質させてしまうのは、仏教者の姿である如来の法衣を身にまといながら、一切の鬼神を崇めて外道と変わらないものとなっているからだ、その問題を見出して詠われています。

外道については、梵士と尼乾志と、具体的にその

姿を名指しされています。梵士とはバラモン教の行者のことです。バラモン教の根幹をなす教えについて、歴史家のユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』の中で、「カースト制に固執するヒンドゥー教徒は、人知を超えた宇宙の究極の力がカーストの優劣を定めた」と信じている。有名なヒンドゥー教の創造神話によれば、プルシャという最初の人間の体から神々が世界を造り上げたという。太陽はプルシヤの目から、月は脳から、バラモン（僧侶）は口から、クシャトリア（武士）は腕から、ヴァイシヤ（農民と商人）は腿から、シュードラ（隷属民）は脚から造り出された。この説明を受け容れれば、バラモンとシュードラの社会的政治的な違いは、太陽と月の違いのように自然で永遠のものとなる。」と語っています。

バラモン階級に生まれた生得を権威とし、それを頂点として救いにも人間存在にも、差別と排除を生み出すことを、宗教の名において正当化する教えがバラモンの教えです。そのバラモンの権威主義とカースト制度を批判されたのが、仏教を開かれた釈尊です。その仏教を象徴する法衣をまといながら、権門の出身者がそのまま寺院社会の高位を占め、救いにも格差と排除を作り出し、それを仏教として自らの権威を誇っていた当時の仏教界の姿を、梵士と変

わらぬものと見られたのでしょうか。

尼乾志は、ジャイナ教徒のことです。ジャイナ教は釈尊と同時代のマハーヴィーラが始めた教えです。苦行と厳しい戒律、特に不殺生を徹底し、自らの業を消し去って輪廻を解脱することが説かれます。それは自分一人の救いに集中するあまり、自分は殺さないが誰かが代わりに殺生を犯している事実が、視野に入らないことになります。政治権力の庇護を受け、その権力の維持の為に現世の祈禱の場となり、それを聖域とした中で自らの未来の救いの確立を求めて、現実の人々の苦しみを顧みることのない寺院の生活に、その姿を見られたのでしょうか。

梵士・尼乾志という外道を、親鸞聖人は「外教邪偽の異執」と表されます。異執という問題を「外教・外道」に見ておられるのです。異執とは、教えに異なる形で執われることです。教えに自分や、教えに関わる自分の姿勢が問われることなく、教えによって自らを権威づけ、他を見下し、そのあり様をどこまでも正当化する、そうした自分の道具として教えに執われることが「異なり」です。そして、そうなることによっていかなる教えも「鬼神」と化するのです。

その異なっていく姿を、外道と変わらぬ姿として、比叡山を頂点とする当時の寺院社会に見て詠われたのです。

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」



「共に歩む道」

仙台教区仙台組徳泉寺

関口真爾 せきぐちしんじ

瓦礫^{がれき}の中にたくさんの人達の人生があった。

涙がとまらなかった。

津波で亡くなった人達の「いのち」が僕を突き動かしている。

放射能で土を汚され、外で走り回れない子どもたちの叫びが僕を立ち上がらせる。

何をするべきなのか。

何が正しいのかわからないままに動き出した。

(仙台仏青「立ち上がれ自分」より)

東日本大震災の時に、仙台教区仏教青年会が全国へ向けて支援協力を呼びかけた文章の冒頭部分です。私も仙台仏青の一員として活動に加わり、津波被害のあった沿岸部への支援や交流、原発事故の影響のある地域からの保養などを行ってきました。この三月で十一年経つ今も何が正しいのかわからないままですが、何もできない無力感の中で、出あった人の「どうしたらいいかわからない」という溜息や、「また会おうね」という子どもたちの笑顔、全国からの様々な支援の声に動かされてきたように感じます。

支援に来てくれた方が「私にとって被災地と呼んでいたものは石巻や好間^{いしのまき}という名前となった。被災者と呼んでいたものは阿部さん、及川さんという名前となった」と語られていて、被災地という場所があるわけではなく、被災者という人がいるわけではなく、被災という状況の一人の人間なのだということをあらためて教えられた思いでした。私たちは被災者であり、支援者でもあるけれど、本当は同じところに立っている。「共に」という世界を生きることができるとのこと。

震災は様々な違いを生みました。地震、津波、放射能、家が残る・残らない、補償がでる・でない、避難する・しない、帰れる・帰れない、放射線量の高い・低い。二〇km圏内・圏外。そこからたくさん

の分断が起きたように思います。震災当初から仏青の仲間が「福島に立ってくれ」と言い続けていて、他人ごとにしなくてほしいという言葉として聞いたのですが、振り返ってみると、分断への怒り、勝手にたてられた被災地フクシマという垣根をはずしてほしいという願いではなかったかと思うのです。

どの人も起きたことへの不安と共に、どこに向ければいいかわからない怒りを抱えているのを感じました。表には怒りとして現れるけれど、その奥には痛みがあった。内にある痛みと悲しみが、外には怒りとして現れていたように思います。

コロナ禍と言われる今もまた、それまでの生活ができない痛み、感染者と感染していない人に分断されていく悲しみや怖れを誰もが抱え、どうしようもできない怒りや苛立ちを持たざるを得ない状況にあるように感じます。

一人の人間として出あいたい。垣根を超えたい。親鸞聖人が当時下類と呼ばれた人々を「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」と言われた言葉に、その願いを感じます。状況によって分断されていく私たちが共に歩める道があることを、親鸞聖人は「われら」という一言で教えてくれているのではないのでしょうか。痛みや悲しみを抱える一人の人間として、出あった人と共に歩めればと思います。



教区教化推進本部 部会紹介

1月号より、教区教化推進本部に置かれる五つの部会を紹介しています。

「教区教化は教区人の手で」という言葉で伝統されてきた願いをより具現化していくため、昨年、あらためて教化推進本部が設置され、教区教化を担うそれぞれの「部会」が誕生しました。「教化の場としての教区」に向けて、各部会が担う課題や取り組みの方向性、そして、発足にあたっての意気込みを紹介いたします。今月は、最後の出版部会です。また、あわせて長副^{おさ}本部長の教区教化に向けての所信をうかがいます。

出版部会

主査	比叡谷 真 ^ア	徳田 潤子 ^カ
副主査	蒲池 義圭 ^イ	杉本 智海 ^カ
部員	井上 至 ^ウ	藤野 顕生 ^キ
	仲野 恵理子 ^エ	前田 素子 ^ク

出版部会の活動について

主査 比叡谷 真

新しく出版部会が発足してから、半年がたちました。当部会がになう主な事業は、発信する教区教化として、教化広報誌『教区だより』を編集発行することです。毎月オンラインで会議を開催して編集作業を行っています。

恥ずかしながら、今回出版部会に入るまで、私は『教区だより』の熱心な読者ではありませんでした。ですが、ときに先輩教区人の文章が目にとまり、心に刺さったことを記憶しています。その言葉から、それぞれの現場において、苦しみ悩みながら、自信教人信の道を歩みつけておられる先輩方のお姿に出あってきたことも事実です。

しかし、そうした言葉に背中を押され歩みだしたつもりでいても、思うにまかせない現実のなかで、また座りこんでしまうのが私の日常です。そんな自身のありかたを破り、立ちあがらしめる言葉にあらためて出あって、どこまでも南無阿弥陀仏の歩みを賜りつづけることが、私たちにかけられた願いであると思います。その願いを繰りかえし確かめ、そして共有していく媒体として、『教区だより』誌面の充実を目指したいと考えています。

そのために、教区教化委員会・教化推進本部各部会・同和協議会はもとより、関連団体や各地区・組の、さまざまな背景をもった教区人にご執筆いただくのはもちろんのこと、熱意をもって教化活動に取り組んでおられる他教区の方々にも、寄稿をお願いしていきます。

また、今後は、新型コロナウイルスの感染状況を考慮しながら、私たち部会員自身が取材して文章化することも大切だと思います。取材活動や編集作業、そして会議そのものが、自身を本願念仏の教えに問いたずねる同朋の会としてひらかれていくことが願われます。

そのなかで、『教区だより』編集を中心としながら、たとえば、過去掲載原稿の冊子化など、関連事業にも取り組んでいく予定です。

私一人が念仏申す身になること

教区教化推進本部副本部長 長 紀子^{のりこ}

この度、京都教区教化推進本部副本部長を拝命しました。大変、重たい役をいただけて戸惑うと同時に、身が引き締まる思いです。

私の教区教化との関わりの始まりは、伝道研修会への参加でした。そこで出会った伝研スタッフの姿は教区教化の具体的な形そのものでした。寝る間を惜しんで伝研に集った人々と語り合うことで、寺で生活していくことの安心感（経済的なことではない）をいただいたような気がしています。

その時の唯一の女性スタッフが退かれることになり、私は彼女を引き継いでスタッフになりました。当時の育成員等研修小委員会の委員です。事業に関わりながら、多くの先生方や参加者の皆さん、また他の小委員会の皆さんとも出会いを重ね、私自身の学びの場を拡げていくことができました。中でも、児童大会のスタッフに加わったことは、私にとつての現場である願念寺での子ども会開催への大きな後押しになりました。伝研の扉を叩いてから十五年程になりますが、教区教化と関わることで、出会いの場が拡がり、私の現場を見直すきっかけをいただいたと思っています。

二〇二一年四月の教区教化委員会規則の改

正により、より多くの教区人が教区教化に関わることができるようになりました。これからも教区教化を通じてどのような人と出会い、どんな学びがいただけるのか、とてもワクワクしています。

新しく男女共同参画部会が設置されました。教区内の教化の現場では圧倒的に男性の数が多く中で、女性であるが故に受けた不快な経験は我慢するということで、なかったことにしてきました。それが大人の対応だと思い込まされてきました。声を出せば次に起こるセカンドレイプから逃げてきました。しかし、今回、男女共同参画の推進に関する提言が教化委員会より出されたことにより、我慢する、黙っていることでは、共に学び出会う場は開かれていかないのだということに気付きました。

女性の数が増えていかないう背景には、五障三従^{しやうさん}という言葉が残されているように、女性が家事、育児、介護という無償の家事労働寺においては留守番を担い、経済活動(寺においては教化活動の表舞台に男性を送り出すことを美德としてきた女性の歴史があり、長年に渡って染み着いてきた価値観はなかなか揺らぐことがありません。

私は今回の新設を、その背景に目を向けていこうとする圧倒的多数の側からの一筋の光明だと受け止めています。男女という枠を外せば、私も圧倒的多数の側に立ち、声なき声を押し潰

してきたこともあったのでしよう。

男女共同参画部会の事業は、押し潰してきた背景とその声に耳を傾け、押し潰されてきた声を上げていける場を創造していく事業だと思っています。部会からの働きかけから、どのような場が開かれていくか。さまざまな枠や価値観を超えて、一人ひとりの存在を尊びあえる場の創造を、そしてその場に身を置かせてもらえることを、とても楽しみにしています。

二〇二一年度 京都教区教化研修計画概要には、

「教区教化とは、地区や組と連動しながら、教区人が集い、出遇い、共に学び、現場で立ち上がる熱と力をもらう「場」である。そして「出向く教化」という現場へのベクトルを大切にし、寺院が仏法に出遇う「場」として開かれ続けることを目指すものである。

「教区教化は教区人の手で」

それは、自分たちの手で教区教化を作り上げていくこと。そして、「教化」である限り、そのすべてにおいて、私一人が念仏申す身になることが願われている。

とあります。「私一人が念仏申す身になること」教区教化にたずさわりながら、この願いの原点に立ち帰り、私の目の前の場を開いていきたいと思っています。

教務所からのお知らせ

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第四組 光久寺前坊守 徳田 明子

二〇二二年十二月二十五日 九十六歳

近江第四組 立光寺前坊守 富田 正枝

二〇二二年一月一日 九十二歳

近江第十一組 妙玄寺前住職 寺谷 仁誠

二〇二二年十二月十九日 九十四歳

近江第二十五西組 正通寺前坊守 竹内 鈴子

二〇二二年一月二十三日 八十七歳

〔敬称略〕

《京都教区得度学習会について》

期 間 二〇二二年三月二十九日・三十日

※千日午後より得度審査を行います。

講 師 教区内講師、本山本願部堂衆

申込み 三月十一日（金）までに、参加申込書を京都

教務所に提出ください。

※詳細は、京都教区ホームページをご覧ください。

イマダカラ

年が明けて少し経った頃、高校生が東大前で起こした事件にとっても驚いた。試験の日にそのような事が起こるとは前代未聞ではないだろうか。動機を聞いてさらに驚いたと同時に「そんな事で…」と思ってしまった。

しかし本人にしてみればその道しかわからなく、その道に進まなければ生きていく意味がないと思うほどその道に強くこだわっていたのだろう。

それに加えてコロナ禍で学校での様々な行事が自粛され、人と会うことも制限される中ではどうしても一人で過ごす時間が増えてしまう。今回の高校生だけに限らず、それは嫌でも自分と向き合わなければならぬ時間が増えるということだ。普段なら人に話すことで気持ちが落ち着くこともあるが、それもできない状況で、自分一人思い悩み、良くない方向に考えが向かってしまうのではないか。そして最悪の結果を招いてしまうのではないか。そのように考えてしまう出来事が最近増えてきている気がする。

この高校生はこれから先、反省していくことになるのだと思うけれども、それだけで済ませてはいけないう。私たち大人が声をかけるだけでも、もしかしたらこのような事件は起こらなかったのかも知れない。私自身、このコロナ禍でもっとこうすれば良かったと後悔する事があった。それぞれ皆苦しい時期だと思うが同じ事が繰り返されないように思うだけでなく行動できる人間になっていきたい。

（出版部会 仲野 恵理子）

編集後記 the editor's note

三月になると早いところでは桜の花が咲き始める。最近知ったことだが、桜は秋のあいだ眠っていて活動しないそうだ。冬の寒さで目が覚め、花を咲かせる活動を開始するらしい。そして暖かくなると蕾がほころび花が咲くという。そんな寒い頃から時間をかけて花を咲かせる準備をしているとは思ってもよらなかった。桜にとっては生きる営みの一つなのだろうが「冬眠したい」と毎冬言っている自分は恥ずかしい。桜で染物をする際、蕾がふくらむ直前の木を使って染めると、どの時期のものより色濃く鮮やかに染まると聞く。その頃の桜を見ると確かに木のまわり全体が色づいているのがわかる。桜の生命力を感じる。

（出版部会 前田 素子）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第384号

発行人 日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2022 (令和4) 年 3 月 1 日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

